

令和2年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部
鹿児島県知事 優秀賞

「土砂災害と人々の命」

鹿児島県 鹿児島市立川上小学校 6年 地福^{じふく} 里音^{りおん}

「え。」

そのこう景を目にしたしゅん間、背すじがこおった。大雨によって崖の上にあった道路がくずれていたのだ。私は、このように道路や崖がくずれ、土砂だけでなく人々の命までまきこむ土砂災害が大きらいだ。

それは、1年前。そのときの思いと土砂災害への思いは変わらない。約1年前。自分が住んでいる地域の土砂災害のことである。何日も続く大雨によって大きな土砂くずれが起きた。そのことは、地域の人々が伝えに来てくださった。家族で出かけて、そのこう景を目にしたしゅん間、

「え。」

と、みんな固まって言葉すらあまり出ない状きょうとなった。ゆいいつしゃべった兄は、
「こんなにひどいくらいくずれるの。」

と、おどろいていた。私は、土砂くずれが起きる前の日に、

「土砂くずれにより数名死亡。数名ゆくえ不明です。」

と、いうニュースを見ていた。私は、

「土砂くずれは自然災害だから、雨が降るといつ起きてしまうか分からない。だが、地域の災害で人が一人も亡くならなくてよかった。」

と、心の中でほっとした。土砂くずれが起きて道路や山がくずれても直すことができる。だが、人々一人一人の命は、なにがあっても治すことはできない。この道路と崖は、9月15日に復興される予定だ。

私はいっしょに住んでいる祖母と、8・6水害について話した。祖母によると、私のおじさんは、8・6水害が起こる前の日に仕事に行っていたらしく、家に帰る人や避難をする人々は、こしまでにごったどろ水につかって移動をしていたらしい。土砂くずれも、あちらこちらで起きるほどの大きな水害だった。テレビの1チャンネルである、「あの日のふるさと」という鹿児島の歴史を知ることができる5分程度の番組には、祖母から聞いたようにどろ水をかきわけて進む人々の姿が見られた。車も半分までつかり、見ているだけでどんなにこわいかよく分かった。しかし、一番こわかったのは、その8・6水害を体験した人々だろう。たくさんのだろ水をかきわけて進まなくては、自分の命は助からないのだから。この話を聞いたとたん私は、

「たくさんの人々がゆくえ不明になったり、死亡者が出たんだろう。」

と、つぶやいた。考えただけでなみだが、ポロポロと出てくる。もう、こんなに大きな災害が起きなければいいのになと、改めて思った。

この作文を通して、改めて自然災害のこわさを知れた。昔起きた8・6水害のような大きな水害は、もうこれ以上起こらないでほしい。ニュースなどで、

「土砂くずれによって、死亡者とゆくえ不明者が出ました。」

なんて、もうこれ以上聞きたくない。だが、そう願っても自然にはさからえず、これからも一生起き続けることだろう。災害にあって、家族や知り合いなどの人々、大切な財産などを失ってしまったかわいそうな人々のためになることを自分なりに考えた。それは、スーパーマーケットやコンビニエンスストアなどによくおいてある募金箱に募金をすることだ。私は、募金箱にできるだけ募金して、急な災害にあってしまったたくさんの人々をこの手で救いたい。